

崇城大にウクライナ研究員

母国と家族思い「お互い頑張る」

ロシアによる侵略で日本に避難したウクライナ人の女性研究員オレナ・プリシアジナさん(35)が、崇城大(熊本市)で研究を始める。情報学部で1年間、訪問研

究員として受け入れられた。「普通の日常にやっと戻れた」と表情を緩め、母国の平和と離ればなれになった家族を思いながら、プラズマ工学の研究に取り組

むつもりだ。

オレナさんはウクライナの首都・キーウ(キエフ)出身。2014年にキーウ大で応用物理学の博士号を取得し、助手を務めてきた。

ロシアの侵略で状況は一

つた。日本に関心があり、学会で知り合い、13年前から親交がある崇城大の青木振一教授(プラズマ物理学)に相談し、大学が出入国在留管理庁など行政機関と協議し、受け入れが実現した。残してきた家族は今も気がかりだ。妹は博士号を取る寸前で侵略が始まった。「いとしく寂しいが、離れた地でもお互い頑張りたい」と話す。

崇城大学

SOJO UNIVERS



来日して記者会見に臨むオレナさん

変した。3月には、自宅隣の家の庭にミサイルが着弾した。国外への避難を決め、書類など必要最低限の荷物を持ち、母と妹、愛犬とポランドを経て、オランダに移った。「戦争によって研究も生活も全て壊された」と振り返る。

避難生活が長期化し、研究を続けたいとの思いが募

り、日本文化を学ぼうと剣道をたしなんでいる。実験の準備が整い次第、研究を始めるという。「大気の中でプラズマ現象を起こせるように研究し、農業などあらゆる分野でのエネルギー開発につなげたい」と抱負を述べた。